学生会員の声

コロナ禍での学生・研究生活

神戸大学農学研究科　　園田　悠介

１．はじめに

私は、2014 年に神戸大学農学研究科を修了後、約 6 年間勤めた行政職を退職し、2021 年 4 月から現在の博士課程に在籍している少し変わった「学生」です。本題の前に、現在の研究の話をさせていただくと、私は、埋設管や溜池を対象として、より安全で効率的な設計手法の確立を目指して、主に模型実験の手法で研究を進めています。ジオグリッドを補強材料として用いていますが、あの柔で薄っぺらな「異物」で、どうして土の強度が上がるのか、ジオシンセティクスを初めて知った時、とても不思議に感じたのを覚えています(今でも説明できる自信はありません)。

さて、本稿では、ジオシンセティクスから少し話題を広げさせていただき、コロナ禍での学生・研究生活について、今の研究室で日々過ごしながら感じる率直な気持ちを述べたいと思います。

２．変わる学生・研究生活（私が在籍する研究室の場合）

コロナ禍で学生の日常や研究活動は大きく変わりました。日常生活で言えば、昼食を各自の席で取るスタイルになったり、懇親会（飲み会）なるものは滅多に開催されなくなりました。

研究活動では、次の 2 つの変化を特に感じています。1 つ目は、学会や現地調査など大学の外に出る機会が減ってしまったこと。大学の外に出るということは、たとえ国内であっても、普段接する人とは異なる属性の人と交流することになります。交流まで至らずとも、大勢の人がいる学会会場に入れば、知らない単語の会話が聞えてきたり、自分とは異なる雰囲気を纏った集団を目にします。この積み重ねで、自分の知る世界が少しずつ広がり、研究や就職に関して幅広い視野を持つことができると考えますが、その機会が減っていることは残念に思います。

2 つ目は、対面発表が少なくなってしまったこと。周囲の学生に、対面かオンライン発表のどちらが良いか尋ねると後者と答えが返ってくることが多いです。私も最近はオンラインに慣れてしまいました。対面発表に何の意味があるのかと聞かれると具体の答えには窮しますが、人前で声を出し、聴講者の表情や反応を見ながら話すことは「おそらく」大切なことだろうと思います。

研究室に入ってからずっとコロナ禍の学生にとっては、今の状況が日常であり、何事もとても器用にこなしているように見えます。ただ、以前の学生生活を想像して入ってきた私にとっては少し寂しくも感じます。オンラインの活用で、距離的制約がなくなり、研究発表会やセミナーなどに参加しやすくなるなど、コロナ禍での変化は悪いことばかりではありません。ポストコロナでは、今と昔、うまく融合したスタイルでより研究生活が充実したものになれば良いと考えます。

３．おわりに

昨年 12 月、第 36 回ジオシンセティクスシンポジウムが、制約のある中ではありますが、対面も含めたハイブリッド形式で開催されるなど、着実に良い方向に向かいつつあると感じています。関係者のご尽力に感謝申し上げるとともに、少しでも早いコロナ禍の収束を願っております。